

・自選五十首・



宮原望子

みやはら・もちこ 1933年、鹿児島県生まれ。'87年「未来」入会。'88年、「現代短歌南の会・梁」に参加。現代歌人協会会員。著書として、歌集『輪唱』『哀蚊』『これやこの』『文身』。年内にエッセイ集『おばさんの茂吉論』を刊行予定。

天窓の棧を洩れくる初秋のひかりは土間に淡き編なす

肌透きてはつかにあをき蚕こらのうへ秋立つ朝の冷氣ただよふ

桑の葉のあひを縫ひつとおづおづと這へば波打つ蚕この背せ

大梁のおもたく暗き納屋ぬちに満ちみちて蚕この息のほひは

桑の葉の重なるかげに光りつつ蚕この吐く息は糸となりそむ

繩梯子風吹くたびに揺れてゐるさびしき村に帰り来にける

朝焼けのうつくしければ喘息のみどの笛の鳴り出でにけり

革椅子のあらねど革のほひして長月長夜雨降りやまず

老嬢の夜食せんとて並べたる白鼠五匹、水餃子五個

兩乙女ザムザムの髪よく乾き朝はススキとなつて揺れをり

きぬぎぬの誰が空涙裏木戸につゆくさの藍濡れて鮮し

〔輪唱〕

五十首を自選するというのは思いの外にむずかしく、これに幾日も悩んでしまった。他人様に採り上げていただいた作を頻度順に拾って並べればいいと思っていたのだが、その場合断片をどうつなぎ合わせるか、第一、それでは、季節感がめちゃくちゃになるではないか。ここではっと気づいたのは、私にとっては、何よりかにより季節感が大事ということだった。夏と冬の温度差、昼と夜のそのくきやかな北薩摩きたさつの盆地に住んでいるせいだろうか。そういうえぼどの歌集も、季節をめぐらせながら編んでいる。

というわけで、やはり季節の歌を出すしかないのだけれど、どの季節からどう移して行くかを考えるのも面倒なので、十月号だから

秋の田の穂の上に霧らふ何もなし謀られるし日々もなつかし
垣に花 海には白帆 別荘の窓にもたれてゐるはづかしさ

「哀蚊」

画像いまあかあかとしてアマゾンの大胸焼けのやうな夕空
更年期とふ名の帽子その上に低気圧とふ帽子も載せて

青蜜柑剥けば思ほゆ昔むかし家出妻吾が乗りにし夜汽車
はや夏の逝くとてほそく泣きやまぬ蚊がここにゐる葉月尽日

音の無き稀妻にまだ照らさるる女を了へし女の小部屋
稀妻かはた稀夫か逝く夏の夜空に深くあさく目合ふ

〈大型で非常に強い台風〉の眼のちひささよテレビの隅に

台風の一過してまだおもき空曼珠沙華らの息を圧さへて

偏頭痛胃痛腰痛一つだに無くてさびしい秋の夜である

タンシチューといふ名の無くば褐色のこの混濁に近づかざらむ
神ならぬわが手にしばし泳がしむ秋の暈のうへの黒紐

夕焼けは石の橋まで染め上げてこの世の終り待ちあるごとし

浮き出づるミステリーサークルあらなくに朝田の霧は霽れわたりたり

ほしいまま黄金の田を見はるかす或る日は女領主のごとく

麦藁の腐れ帽子のその下に必ずあらん案山子の脳

肩胛を張らねばならぬさみしさに案山子の頭日ごと傾く

巨いなる夕陽とわれとみつめ合ふ羞しき間に鴉の入り来
くつきりと夕焼け空に影をなすために鴉は黒く生まれた

「これやこの」

秋の歌、ということにしてしまった。

こんな決め方にも明らかなように、私は根
気よく緻密に考えたり組み立てたりするのは
得意ではない。即詠に近いものをそのまま送
稿して後悔を繰り返してばかりいる。当然、
こういう粗削りの歌は、野太いとかたくまし
いという評をしばしば受けることになる。女
性に対しては必ずしも誉め言葉ではないのは
よく承知している。

だが面白いことに、こんな具合に私に度胸
のようなものをつけてくれたのは、他ならぬ
短歌である、と本人は思っているのである。
出発の時点で河野愛子に、何も遠慮はいらな
いと言われた。「南の会」の伊藤一彦には、
どんな歌えは自分が見えてくると言われた。
安永路子には、嘘はすぐばれるから正直にと
教えられた。以前の私は、職場の英語塾の小
学生にさえ言われるほど神経質で体調不良で、
絶えず何かの薬を飲んでいたので、短歌を始
めて五年、十年、十五年……、年々丈夫に元
気になり、いつのまにか別人のように楽に暮
せるようになった。体重まで付随して増える
のは困ったことだけれども。

私は六十三歳で毛染めをやめて白髪になっ
た。一大決心をするのにまず白髪をたく
さん作って発表し、もう後には引けぬと思っ
て実行した。短歌に背中を押してもらった。

これやこのヤマセミ閣下しまらくを留まりいませし杙くの頭ぞ
おむすびの新米一粒一粒の弾くを見れば秋光つよし

セーターの黒きを黒きに替へ来しあたらしきわれと君知らざらむ

一度も葉脈を見ず虫を見ず「鬱」といふ字を好む虫眼鏡

白髪に火のつきさうな秋日和どこまで続く一本道ぞ

「文身」

秋晴の峠に立ちてヤッホーと叫ばんか叫べるや六十四歳

一人二人三人の恋人 四人五人みんなさよなら 白髪になつたよ

冷まじく月の光に濡れながら夕顔しろき蛾を吐きにけり

白壁の上に白蛾は止まりたりうすき己れの影を抱きて

初冬の陽きらめく川面に膨らんで白鳥になる気かビニール袋

返り咲きの花をこぼして崖の上の樹のさびしさは見られたりけり

大いなる欠落ならずや東西南北ただひとひらの雲もなき空

遠ざかる群のちりぢり残すこゑ雀さへ渡り鳥めき秋は

大いなる夕陽に向きてへりくだる心何しかひもじさに似る

さびしいと言へざる者は夕焼けの下につぶやく おなががすいた

裏切らず吾わを待ちをらむ炊飯器ふくふくと匂ひを上げて

人形をひとり残らず真処女のまま老いしめてわれも老いゆく

湯上りはまだ薔薇色になりたがる頬二つあり白髪の下に

老女われの上に婆なる位階あり更に老あり秋天畏し